

中国「七夕型・天人女房」における牛の皮についての考察

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学文学研究科表現文化学教室 公開日: 2023-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丁, 嘉芸 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24544/omu.20230403-003 |

中国「七夕型・天人女房」における牛の皮についての考察

丁 嘉 芸

『表現文化』第12号

2023年4月12日刊行

p. 45-59

ONLINE ISSN:

2758-786X

DOI:

10.24544/omu.20230403-

003

はじめに

人間の男と天女との結婚を主題にした天人女房譚は、世界の様々な国・地域・民族に伝承され、人類に最も普遍的に伝わる民話の一つといえる。その中でも、七夕の出会いを結末とする「七夕型・天人女房」は、主に中国を中心とした東アジアに広く伝わっている。中国の「七夕型・天人女房」に関して、類型、モチーフ構成から、起源、変容、伝播まで、すでに様々な方面から多くの考察が行われている。

中国の「七夕型・天人女房」において、動物援助者として登場する牛が注目されてきた。耕作に役に立つ牛は古くから世界各地に農耕神として信仰されていたため、この話における牛は一般的に農耕信仰と関連付けられ、犠牲の動物と考えられている。君島(1965)は動物の皮を着るか、もしくは動物の手引きで昇天するというモチーフは、中国における牛供犠の慣習に由来すると考えている⁽¹⁾。しかし、中国最古の漢字字典『説文解字』では「牲、牛完全」⁽²⁾とあるように、牛を祭儀に用いた場合、完全な姿で使われるのが一般的であり、牛の角を用いた例もあるが、牛の皮のみ用いたことは見られない。つまり、牛が犠牲動物という説は、なぜ昇天モチーフにおいて牛自体ではなく、牛の皮で織姫を追いかけるのかを説明するのが難しい。一方で、呉(2016)は、牛の皮は、養蚕起源神話としての「蚕馬神話」における馬の皮が少女を包んで空を飛ぶというモチーフに由来するという見解を示している⁽³⁾。織姫が牽牛と結婚して、養蚕と織物の技術を人間に教えるというモチーフが中国の「七夕型・天人女房」によく見られるので、織姫は蚕の神とされる可能性があると考えられている。この仮説は十分な根拠が示されているとは言えず、資料を補足する必要があるが、非常に示唆に富むものである。

牛は世界各地の様々な神話、伝説、民話の中で活躍しているが、牛の皮で昇天するというモチーフは中国「七夕型・天人女房」独自のものと言える。そこで、本稿は中国の「七夕型・天人女房」における牛の皮の意味に注目して考察する。君島(1965)と呉(2016)の二つの観点を踏まえたうえで、中国の「七夕型・天人女房」では、なぜ牛の力を借りて天に昇る時には牛の皮が重要であるのか、他の説話からどのような影響を受けていたのかについて新しい仮説を提示する。

(1) 君島久子「中国の羽衣説話——日本の説話との比較」『中国大陸古文化研究』中国大陸古文化研究会、1965年、17-28頁。

(2) 許慎『説文解字』卷三・牲部。

(3) 呉曉東「蚕脱皮為牛郎織女神話之原型考」『民族文化研究』中国社会科学院民族文学研究所、2016年、28-38頁。

1. 中国の「七夕型・天人女房」における「男耕女織」

(1) 中国の「七夕型・天人女房」

中国の「七夕型・天人女房」について、その源に立ち返ると、『詩経』の「小雅」⁽⁴⁾に「維天有漢、監亦有光。跂彼織女、終日七襄。雖則七襄、不成報章。皖彼牽牛、不以服箱（天の川に輝く三星の織女は、一日に七回も機織りをして、錦綾を織りあげることはいできない。輝く牽牛星は、織物を車に載せて車を引くことはいできない）」という最も古い例がみられる。「牽牛」、「織女」という二つの星はその時代から様々な伝承の主題として伝えられてきた。ところが、この時期の牽牛織女はまだ天上の星として存在しているだけであり、お互いの間に感情のつながりはまだ起きていない。漢代になると、牽牛織女に関する記録は次第に増えてくる。『風俗通』⁽⁵⁾には「織女七夕当渡河、使鵲為橋（織女は七夕に川を渡り、カササギに橋をかけさせる）」という記録があり、そして、『四月民令』⁽⁶⁾の中に、「七月七日曝經書、設酒脯時果、散香粉于筵上、祈請于河鼓、織女、言此二星当会（七月七日に經書を虫干しする。筵の上には酒脯や果物などを並べ、香粉をまいた。河鼓と織女の二星が会うので、祈りを捧げた）」という記載から見ると、七月七日という日付はすでに牽牛織女と結びつけられている。『古詩十九首』⁽⁷⁾になると、「迢迢牽牛星、皎皎河漢女。織織擢素手、札札弄機杼。終日不成章、泣涕零如雨。河漢清且淺、相去複幾許。盈盈一水間、脈脈不得語。（遠くの空に輝く牽牛星、天の川の織女。織女は手を抜き出して機を織る。一日中織っていても錦綾は出来上がらず、涙が雨のように流れ落ちている。天の川は澄んでいるうえに浅い。牽牛との距離はそれほど遠くはないのに、言葉を交わすことはいできない。）」という牽牛織女の恋愛を描いた詩歌が初めて見られる。

このように、古い時代の牽牛織女に関する話は主に詩歌などの文字記録によって伝承されていたものである。これを本論文では、民間の口頭伝承としての「七夕型・天人女房」と区別するため、古い七夕伝説と呼ぶことにする。

漢代以後、神仙鬼怪のことを述べた志怪小説の流行につれて、七夕に関する民間説話は現在の形に一歩近づいた。中国民間に伝わる「七夕型・天人女房」では、男性主人公は牛飼い、女主人公は織姫であり、彼らの仕事と生活は古代中国の伝統的な「男耕女織」のパターンに従っている。その基本的な構成モチーフは以下のとおりである。

1. 両親がなくなった後、兄嫁にいじめられた牛飼いは一頭の牛を連れて出ていく。
2. ある日、牛は牛飼いに、川で水浴びをしている織姫の衣を隠すように指示する。
3. 天上へ帰れない織姫は牛飼いの妻になって、一人の息子と一人の娘を産む。

(4) 黎波訳『詩経』、吉林美術出版社、2015年、401頁。

(5) 宗懐著、守屋美都雄訳注『荆楚歳時記』、平凡社、2000年、183頁。

(6) 同書、183頁。

(7) 新訳『昭明文選』、三民書局、2001年、1283頁。

4. 王母がこのことを知ると、織姫を捕らえて連れ帰る。
5. 牛飼いは牛が死ぬ前に教えた方法で、牛の皮を着て息子と娘を連れて天上へ行く。
6. 王母は金の簪で天の川を引いて、牛飼いと織姫を隔て、毎年七月七日だけカササギが作った橋を渡って会わせる。

『中国民間故事集成』⁽⁸⁾における天人女房（漢族の話はすべて七夕型である）に関する30話の話を調べて、それらの昇天モチーフを表にまとめたものが表1である。

(8) 中国民間故事集成編輯委員
『中国民間故事集成』全巻 中国ISBN中心、1994-2010年。

| 地域 | 民族 | 昇天する方法 | |
|-----|----------------|---|---|
| 河北省 | 漢族 (2) | 牛の皮を着る。 | |
| | | 牛の皮を剥いて靴や帽子を作る。 | |
| 新疆省 | 漢族 (1) | 牛の肉を食べて仙人になり、牛の皮で作った靴を履いて天に昇る。 | |
| | 少数民族 (1) シベ族 | 小鹿に助けられ、桃を食べて天に通じる梯子をのぼる。 | |
| 山東省 | 漢族 (4) | 牛の胴体を土の中に埋め、土の入った4本の牛の足を持って天に昇る。 | |
| | | 牛の皮を踏む。 | |
| | | 牛の角が船となって空に飛び上がる。 | |
| | | 牛の吐く息が五彩のリボンになって空へ通じる。 | |
| 河南省 | 漢族 (2) | 牛の皮に水を注ぎ、その皮に乗って天に昇る。 | |
| | | 牛の肉を家の裏の空地に埋め、牛の皮で作った靴を履いて天に昇る。 | |
| 安徽省 | 漢族 (2) | 牛に乗って天に昇り、天の川を埋めるために牛の尾の下に土を三握詰めた。 | |
| | | 昇天のモチーフがない。 | |
| 上海市 | 漢族 (1) | 牛の皮を着る。 | |
| 浙江省 | 漢族 (5) | 牛の皮を剥き、その中に粳穀を詰め、牛の形にして縫ってから、それに乗って天に昇る。 | |
| | | 昇天のモチーフがない。 | |
| | | 昇天のモチーフがない。 | |
| | | 昇天のモチーフがない。 | |
| | | 織姫が赤い刺繍靴をはいて天に飛び上がる、牛郎についての昇天モチーフがない。 | |
| 福建省 | 漢族 (3) | 織姫は空から通天帯を投げたが、王母に切断された。その後、カササギを牛郎に「雲頭靴」を送らせる。 | |
| | | 牛肉を食べて仙人になり、牛の皮で作った靴を履いて天に昇る。 | |
| | | 昇天のモチーフがない。 | |
| 広西省 | 漢族 (1) | 息子が鶴に乗って天にのぼる。 | |
| | 少数民族 (4) | チワン族 | 天女が空から黒い糸をおろす。 |
| | | マオナン族 | 「九層皮」という植物繊維で網を作り、フェニックスが網をつかんで男を持ち上げる。 |
| | | ヤオ族 | 天女が空から五彩の帯をおろす。 |
| | イ族 | 天女が空から「背帯脚」(サスペンダーに似ているもの)をおろす。 | |
| 貴州省 | 少数民族 (1) | ミャオ族 | 牛に乗って天に昇る。 |
| 雲南省 | 少数民族 (2) | ハニー族 | 天女が足に糸をつなぎ、男がそれをつかんで天に昇る。 |
| | | ヤオ族 | 金色の鹿に虹の橋を伝って天に昇るように教えられた。 |
| | | | 三つの色の糸が垂れると天女に言われたが、結末がない。 |
| 海南省 | 漢族 (1) | 天女が金の簪を放り投げ、天に通じる石柱となり、男はその石柱を登って天女に会う。 | |

表1 () は話数を示す。

上の表から見ると、『中国民間故事集成』における天人女房に関する30話の話の中で、漢族の「七夕型・天人女房」が一番多く、22話ある。昇天モチーフがある中国の「七夕型・天人女房」では、牛の皮を用いて天に昇るのが一般的であるが、各々の地域で生まれた様々な昇天方法も認められる。多くは牛を中心に展開したものであるが、織姫の刺繍靴、通天帯などもしばしば見られる。

(2) 星に関する古い七夕伝説から見る「男耕女織」の要素

そもそも「七夕型・天人女房」は古代の人々が牽牛、織女という二つの星の由来を説明した話である。中西進は、牽牛織女に関する古い七夕伝説である「牛女神話」では男が耕し、女が織るという農耕社会の生産活動や生活様式が天上に投影されていると指摘している⁽⁹⁾。中国では、天体観測の歴史は非常に古い。湖南省の馬王堆漢墓から出土した前漢の帛書である『天文气象雑占』は世界最古の彗星図譜とされ、この帛書の伝写時期は遅くとも三世紀の前漢初期に過ぎないことが考証されている⁽¹⁰⁾。古代中国の民衆たちは星を観察して、星の変化と季節、気象の変化が密接に関わっていることを発見した。農耕経験が豊かになるにつれて、人々は農耕活動と天上の星の変化を対応させたり、天上の星を名付けたりして、初期の星崇拜を形成した。河南省安養で出土した殷墟の甲骨文字によると、紀元前一四世紀の商王朝のころから、古代中国人は天上の星に名前をつけ、その星の変化に従って農業を促し、祭祀を行ったという。

古い七夕伝説に関する最古の文献である『詩経・小雅』には、牽牛、織女が星として描かれている。「跂彼織女、終日七襄（その輝く織女は、一日に七回も機織りをする）」と書いてあるが、ここでは、織女の仕事は織ることであり、牽牛星はまだ人格化されておらず、車を引く牛であることが示されている。つまり、古い七夕伝説の最初の段階では、牽牛より織女の方が優位に立っていたことがわかる。また『史記』「天官書」には「牽牛為犠牲、其北河鼓、(中略)婺女、其北織女。織女、天女孫也（牽牛は犠牲であり、その北は河鼓である。(中略)婺女の北は織女である。織女は天女であり、天帝の孫娘である）」とある。前漢時代の一世紀頃まで、牽牛は犠牲動物とされ、織女は天帝の孫娘とされていたことが分かる。『風俗通』には「織女七夕当渡河、使鵲為橋（織姫は七夕に天の川を渡るために、カササギに橋をかけさせた）」とある。織姫が川を渡ろうとしていることは書かれているが、誰に会おうとしているのかは書かれていない。当時まで、七夕といえば、織女の方が注目されていたことがわかる。

上記の古い七夕伝説に関する文献や資料から見ると、この二つの星の名前の由来については、王孝廉（1974）が指摘したように、織女は原始的農耕信仰における桑の神、牽牛は穀物神の象徴であり、牽牛織女に関する説話は、地上の農耕信

(9) 中西進、王曉平「七夕星歌的交流史溯流(上)―中日詩歌自然意向対談録」『日本語学習と研究』、1994年、45頁。

(10) 王樹金「馬王堆漢墓帛書『天文气象雑占』研究三十年」湖南省博物館館刊、2007年、34頁。

仰の崇拜対象と実際の星像との結合によって形成されたものである⁽¹¹⁾という可能性が高い。つまり、現代の天文学者が新発見した惑星に有名人の名をつけるように、古代人は農耕信仰の中で代表的な農耕の神である牽牛や養蚕の神である織女を二つの星の名とし、その後、星への関心が高まり、牽牛と織女をめぐるさまざまな伝承が生まれたという。次に、民間に伝わる「七夕型・天人女房」はどうなっているかを見てみよう。

(3) 民話から見る「男耕女織」の要素

魏晋南北朝以降に形成された民間に伝わる「七夕型・天人女房」は、すでに白鳥処女説話と結びついており、「服を盗む」「妻を求めて天に昇る」「天の川に隔てられている」などのモチーフを形成し、農耕を生業とする人間の牛飼いと天上から来た織女との恋愛物語になっている。『中国民間故事集成』に収録されている現代中国に伝わる「七夕型・天人女房」の話は、牽牛と織女の仕事や生活を次のように描いている。

天河老人生了个女儿，相貌好，又灵巧，能織一手好布，大家叫她織女……織女隔壁有个看牛細儿，大家叫他牛郎⁽¹²⁾。(浙江省)

(天の川の老人に娘が生まれた。顔も美しく、器用で、上手な布を織るので、織姫と呼ばれていた。織姫の隣に牛を飼っている少年がおり、牽牛と呼ばれていた。)

就這樣与牛郎結为夫妻，牛郎屋里有金有銀，按理勿做也有吃了，牛郎還是勿停地耕啊種啊，織女也忙着穿梭織布，两夫妻生活十分和諧⁽¹³⁾。(浙江省)

(こうして織姫と彦星は夫婦になった。牛飼いの家には金や銀があり、働かなくても食べられるはずであったが、牛飼いは耕したり種を作ったり、織姫は布を織ったりして、二人は不自由なく暮らしていた。)

分家時，牛郎僅分得一頭老牛，依靠這頭老牛，自耕自食。……織女做了牛郎的妻子，男耕女織，夫唱婦隨，生活過得美滿幸福⁽¹⁴⁾。(山東省)

(二人の兄弟が分家する時、牛郎は一頭の老牛に分けられただけである。彼はこの牛を頼りに耕作する。……織女は牛郎の妻となり、男耕女織しながら幸せに暮らしていた。)

これらの描写から見ると、二人はたしかに男が畑を耕し、女が機を織って生活していたことがわかる。中国「七夕型・天人女房」に関する多くの研究は、これを牽牛と織女の婚姻譚とみなし、牽牛および牛に見られる農耕文化の要素に注目している。一方で、織女に関連する養蚕文化的要素は七夕の行事の視野の中で考

(11) 王孝廉『中国神話世界・下編：中原民族的神話与信仰』洪葉文化事業有限公司、1974年、146頁。

(12) 中国民間故事集成編輯委員『中国民間故事集成・浙江卷』中国ISBN中心、1997年、304頁。

(13) 同書、301頁。

(14) 中国民間故事集成編輯委員『中国民間故事集成・山東卷』中国ISBN中心、2007年、240頁。

察されることが多い。中国「七夕型・天人女房」における養蚕文化の要素については、以下のように描写されている。

織女把带来的蚕分給姐妹们，并教大家养蚕，抽糸，織绸缎⁽¹⁵⁾。(福建省)
(織姫は天上から持ってきた蚕を近所の女の子たちに分け、蚕を育てたり、糸をひいたり、絹を織ったりすることを教えた。)

(15) 中国民間故事集成編輯委員
『中国民間故事集成・福建卷』中国 ISBN 中心、1998年、238頁。

有一天，天上織女仙子偷偷跑到南天門外的云頭上，向下界看，她看到凡間夫妻恩愛自由自在，想自己在天宮当仙女，還不如凡間好，就暗暗下凡来到一座山上，和个看牛郎相好，結成夫妻。她教凡人养蚕抽糸織布⁽¹⁶⁾。(福建省)
(ある日、天に住んでいた織女は、こっそり南天の門の外の云の上に行き、下を見ていた。人間の夫婦が仲よくて、自由に暮らしているのを見て、天宮にいるよりはこの世の方がましだと思い、ひそかに山に下りて、牛飼いの少年と愛し合って、夫婦になった。彼女は人間に養蚕や糸をひき、布を織る技術を教えた。)

(16) 同書、215頁。

これらの話において、織女が人間に養蚕を教えていたことが語られている。それによって、織女が紡織の神とされるだけでなく、人間の養蚕起源にも関わっていると考えられていることが分かる。次に、以下の例話を見てみよう。

玉帝觉得長久这么下去也不是办法，既誤了織錦，又傷了心思，就叫伝令天神去伝旨，讓織女回深院去好好織錦，每隔七日准許他们夫妻見一次面⁽¹⁷⁾。(浙江省)
(天帝は、織姫が悲しんで錦を織る仕事を怠ったと思った。そこで、使者を呼んで、織姫に織ることに専念して、牛郎と七日に一回会うことを許可したと伝えさせた。)

(17) 中国民間故事集成編輯委員
『中国民間故事集成・浙江卷』、303頁。

花鵲滿口答应，展翅飛往天宮，把織女一家的离別之苦，盼望团聚的急切之情，稟告給玉皇，王母。可是花鵲把織女說的“逢七团聚”誤伝成了“七七团聚”⁽¹⁸⁾。(安徽省)
(カササギは織姫に頼まれたて天宮に飛び、織姫夫婦の別れの苦しさ、再会を望む気持ちを玉皇、王母に伝えた。ところが、カササギは織姫が言った「七に逢う」を「七七に逢う」と誤って伝えた。)

(18) 中国民間故事集成編輯委員
『中国民間故事集成・安徽卷』中国 ISBN 中心、2008年、296 - 297頁。

以上の例では、二人は元々七日に一度、あるいは「七」の数字が入ってる日に会うことができたのに、カササギがそれを間違えたために毎年七月七日に一度会うようになったと語られている。蚕は七日ほどに一度皮を脱ぐが、二人が会う日も「七」に関わっている。この間にも何らかの関係があるはずであろう。

李(2006)は「織女が牽牛に嫁ぐ七夕は本来、牽牛によって男性のつとめである農耕、織女によって女性のつとめである養蚕・紡織を代表させて農作物の豊作を祈る、一種の農耕儀式であつたらしい」⁽¹⁹⁾と指摘している。上記の中国の「七夕型・天人女房」の例話から見ると、この牽牛と織女との婚姻譚は、古代中国の農耕民と養蚕民の婚姻を背景にした物語ともいえるであろう。牽牛は農耕民の代表とされ、織女は養蚕民の代表とされ、両者は民話の世界では、天女が降りてくるというモチーフで出会い、また牛の皮で天に昇るというモチーフで再会する。

(19) 李守愛「日本の平安時代における『七夕』・『乞巧奠』の受容の過程について」成大宗教與文化學報、2006年、75頁。

2. 馬の皮から牛の皮へ

中国の「七夕型・天人女房」における農耕文化的要素については、すでに多くの先行研究がなされているが、織女と養蚕文化とのつながりに関する先行研究は相対的に少ない。その中で、代表的なものは吳曉東の「蚕蜕皮为牛郎织女神話之原型考」であり、彼は蚕が織女の原型であると主張し、牛郎が牛の皮で織女を求めて昇天するモチーフは、養蚕起源神話である「蚕馬神話」における「馬の皮が蚕と化す」というモチーフに由来すると考えている。本稿では、織姫と養蚕文化のつながりに注目して議論を進めるので、ここで、まず「蚕馬神話」について簡単に説明し、その後、吳曉東の説について論じる。

(1) 養蚕起源神話としての「蚕馬神話」

「蚕馬神話」は中国の養蚕起源神話とされ、古代中国人が蚕を育てていた時に蚕の形を観察して創作したものであると考えられている。中国において、養蚕と女性を結びつけるのは、四千年前の周の時代に遡ることができる。遊(2008)は、『隋書』における「北周制、以一太宰親祭、進尊先蚕西陵氏。(北周には、西陵氏に豚、牛、羊、すなわち太宰を供える制度がある。さらに、彼女を人々に養蚕の技術を教える神と定めた)」という記述を根拠に、北周の人びとが既に蚕を神話の中の黄帝の妻である西陵氏と結びつけていた⁽²⁰⁾と指摘している。戦国時代の『荀子』には、「身女好而頭馬首(蚕は女性の身体のように柔軟で頭は馬に似ている)」⁽²¹⁾と記されている。蚕の頭を馬の頭に似たものとする考え方が、確かに昔はあったことがわかる。新城(1991)⁽²²⁾によれば、この時代の銅器の画像紋から見ると、養蚕の活動や儀礼などは主に王后などの高貴な身分の女性たちによって行われていたようである。『山海経・海外東経』になると、「欧糸之野、在大踵東、一女子跪拋樹欧糸。(欧糸の野は大踵の東にあり、ひとりの女子がひざまずいて、樹によりそい、糸を吐く。)」⁽²³⁾という記載がみられる。当時の人々がすでに蚕と女、馬を結びつけていたことが示されているが、物語にはなっていない。「蚕馬神話」に関する最古の記録は『搜神記』の「女、蚕と化す」である。この話の概略は次のとおりである。

(20) 游修齡『中国農業通史・原始農業卷』中国農業出版社、2008年、77頁。

(21) 荀子著、張覺校注『荀子』上海古籍出版社、2015年、127頁。

(22) 新城理恵「先蚕儀礼と中国の蚕神信仰」『比較民俗研究』、1991年、10頁。

(23) 郭璞著、沈海波校注『山海経』上海古籍出版社、2015年、495頁。

昔、ある家の父親が遠征をして、家には娘一人と雄馬一頭が残された。娘は父親が恋しくて、雄馬に向かって、「もし、御父様を連れて帰って来てくれたら、お嫁さんになるよ」という冗談を言った。それを聞いた雄馬はすぐ父親のところに走り去った。数日後、父親が馬に乗って帰ってきた。ところが、娘を見ると、雄馬の様子がおかしくなった。父親が娘に尋ねると、娘は雄馬との約束を打ち明けた。これを知った父親は雄馬を殺して、皮を剥いで庭に晒した。ある日、娘が庭に馬の皮の近くに遊んでいると、馬の皮は立ち上がり、娘を包んで天に飛び去った。数日後、庭の大木の枝の間で、蚕に変身して糸を吐いていた娘と馬の皮が発見された。そのため、その大木は「喪」と同じ音をもつ「桑」となづけられた⁽²⁴⁾。

(24) 干宝著、余引校注『搜神記』
貴州民族出版社、2019年、596
-600頁。

これ以後、民間に伝えられた蚕馬神話は、時代や場所など細部の記述は多少違いがあるが、そのモチーフ構成は以下ようになる。

1. 娘は誰かが父を連れて帰ってくれたら、そのものの妻になると誓った。
2. 馬が娘の父を連れて帰った。
3. 父親は娘と馬の結婚が許せなかった。
4. 父親が馬を殺して、馬の皮をはがして庭に晒した。
5. 馬の皮は娘を包んで天に飛び去った。
6. 娘は蚕になった。

前述したように、古代中国では、庶民階級は一般的に男が耕し、女が織するという生活様式に従って暮らしていた。庶民の女性たちは紡織の仕事だけでなく、養蚕の作業も兼ねていた。上流階級においても、儀礼としての養蚕活動では主に女性が働いていた。以上の養蚕起源神話からみると、蚕は古くから女性と結びついていたため、織姫は古い養蚕起源神話の影響を受けて蚕の象徴となった可能性があると言える。

(2) 蚕馬神話に由来する昇天モチーフ

ここまで、織姫と養蚕起源神話の関連を明らかにするために、牽牛織女二星の起源と養蚕起源神話の歴史を簡単に述べた。これは中国の「七夕型・天人女房」における牽牛が牛の皮を借りて昇天する理由を明らかにする手がかりになる。次に、牛の皮というモチーフの由来について呉曉東の論説を簡単に紹介しておこう。

呉曉東以前の七夕研究では、牛の皮という要素はあまり注目されておらず、牛供犠として考えられていた。前述のように、中国古代の祭儀では完全な姿で使われる牛がほとんどであり、牛の皮はあまり使われなかったので、牛の皮には別の

意味があると考えるべきである。呉曉東は「蚕脱皮為牛郎織女神話之原型考」⁽²⁵⁾「从蚕馬神話到槃瓠神話的演變」⁽²⁶⁾という二つの論文の中で、「蚕馬神話」という話が日中「七夕型・天人女房」の共通の原型の一つであるという新しい可能性を提起した。呉は、中国浙江省に残っている「蚕牛神話」の一例を取り上げ、そのモチーフ構成が「蚕馬神話」と一致しているので、「蚕馬神話」が「七夕型・天人女房」へと移り変わる過程で残されたものではないかと推論している。「蚕馬神話」が「蚕牛神話」へと変化する過程について、「蚕馬神話」は蚕の擬人化した織姫についての神話なので、天上で紡織を担当すると思われる女宿（織女星の古い名）と関連付けられ、女宿の隣に牛宿があるので、織姫と馬の話は織姫と牛の話となり、その後、白鳥処女説話と結びついて現在中国の「七夕型・天人女房」となったという。呉によれば、牛の皮は「蚕馬神話」における馬の皮が少女を包んで空に飛ぶというモチーフに由来する。織姫が服を失うことは蚕が古い皮を脱ぎ捨てることを意味し、牛郎が牛の皮を着て織姫を追いかけることは、牛の皮を使って蚕の皮に着替え、脱皮の全過程を終えることを意味する。

呉曉東の説は、牛の皮の意味を説明するのに参考になるが、問題点もある。呉が「蚕牛神話」の例話とした話は『浙江省民間文学集成・嘉興市卷』に収録された「黄牛化蚕（黄牛、蚕と化かす）」である。そして、この話が採集された浙江省は長江下流域にあり、稲作と漁撈を生業とする長江文明に属し、中国における養蚕の発祥地でもある。浙江地方では、農民のほとんどが「男耕女織」のパターンに従って暮らしており、そのため、この地方には蚕と牛と一緒に語られている民間伝承が多く伝わっている。しかし、この文献の中に収録された話はすべて二〇世紀の中葉に採集されたものであることに加え、蚕牛神話は他に例が見つからないため、呉が提示する例話が古代から伝わってきた話とは言い難い。近現代の浙江地方の養蚕民は馬になじみが薄かったため、蚕馬神話を語る際には、よりなじみ深い牛に置き換えて伝承した可能性が高い。

したがって、ただこの一つの蚕牛神話の例話によって、それが蚕馬神話から「七夕型・天人女房」への中段階であるという主張は、説得力に欠ける。呉が提示した蚕馬神話の特徴を踏まえたうえで、蚕馬神話と中国の「七夕型・天人女房」との関連性を改めて考えなければならない。

(3) なぜ馬の皮が天に昇れるのか

呉（2016）によると、「蚕馬神話」では、馬の皮が少女を包んで空に飛ぶというモチーフが重要であるが、ここでの問題点は、なぜ馬の皮が天に昇れるのかということである。以下ではこの問題について検討する。

まずは「黄牛化蚕」の話と蚕馬神話を簡単に比較してこのタイプの話の核心モ

(25) 呉曉東「蚕脱皮为牛郎织女神话之原型考」『民族文化研究』中国社会科学院民族文学研究所、2016年、29-38頁。

(26) 呉曉東「从蚕馬神話到槃瓠神話的演變」『黔南民族師範学院学報』、2016年、6-10頁。

テーマを確認する。「黄牛化蚕」の話の概略は次のとおりである。

昔、銭塘江の北岸に裕福の家がある。その家には一人の娘がいて、生まれてからまだ一度も家を出たことがなく、毎日繡楼で刺繡をしていた。ある日、娘は女中に勧められて、庭へ遊びに行った。それから、娘のお腹はだんだん大きくなってきて、医者は娘が妊娠していると言った。女中の話によると、娘はその日庭で大きな牛を見て気に入り、しばらく一緒に遊んでいたようだ。それを聞いて、娘の父親はとても怒って、牛を殺させて、牛の皮を庭の大木に干させた。何日かすると、風が吹いて、牛の皮が舞い上がり、娘を包んで空へ飛んで行った。父親は、娘の行方を捜し、大きな木の上から、あの牛の皮を見つけた。牛の皮の中には黒い虫がたくさんうごめいていて、「これは娘が変ったものかもしれない」とみんなが言った。母親はそれらの虫を集めて、竹柀の中に入れて飼って、その大木から桑の葉を食べさせた。やがて黒い虫は白い蚕になってから、繭になった。この繭から出る糸は衣服を作るのにちょうどよかった。母親はこうして一年一年この蚕を育てた。それ以降、銭塘江北岸の農村では、みんな蚕を飼うようになった⁽²⁷⁾。

(27) 陸殿奎編「黄牛化蚕」『浙江省民間文学集成・嘉興市巻』浙江文芸出版社、1991年、18頁。

古代の蚕馬神話では、父が外出した理由は戦争と関連していることが多いが、民間に伝わる蚕馬神話では、父の身分が地元の商人であることが多い。身分と外出の理由は異なるが、基本的には、

結婚を承諾する→約束を果たす→婚約破棄する→馬を殺害する→馬の皮が娘を包んで天に昇る→娘が蚕と化す

というモチーフ構成になっている。上掲の「黄牛化蚕」という話では、「結婚を承諾する」「約束を果たす」というモチーフが欠如して、娘が牛と遊んで妊娠することになっているが、最も重要なモチーフは「女が蚕と化す」である。そして女が蚕と化す一番重要なポイントは、女が皮に包まれて空へ舞いあがるということである。蚕馬神話であれ、蚕牛神話であれ、女は皮に包まれて空へ舞いあがり、蚕と化す。

ここで留意したいのは、馬の皮、牛の皮に昇天の力があるとされていることである。なぜ、馬の皮、牛の皮に包まれると女は空へ舞いあがるのか。この説明として鍵になるのが、繭に天に昇る力があると考えられていたという事実である。中国河南省仰韶遺跡から出土した現在知られている最古の絹織物が子供の死体を包むのに使われたことや『礼記』の記載から、古代中国では、死者の魂が天に昇るのを助けるために、絹織物を繭の形にして死者を包んでいたという葬儀風俗があ

ったことが分かる⁽²⁸⁾。これは、なぜ女が皮と結合して空へ舞い上がり蚕と化するのか説明してくれる。蚕が繭を破って蝶になることから、おそらく古代中国人は繭には天に昇る力があると考えていたのだろう。蚕馬神話においては、蚕の柔らかい体が女性を連想させ、蚕の頭が馬に似ていることにより、蚕の体を包んでいる繭が馬の皮と想像されている。つまり、馬の皮は繭の象徴なのである。それゆえ、馬の皮は繭の天に昇る力を持つようになったのではないかと推論できる。ある特定の動物の皮に昇天する力があるのではなく、繭の象徴としてその皮に昇天する力が与えられているのであろう。そのため、牛に馴染み深い浙江地方の養蚕民によって語られている「黄牛化蚕」では、馬の役割が牛に置き換えられ、昇天することができるのは牛の皮となった。

(28) 趙豊「絲綢起源的文化契機」『東南文化』、1996年、73頁。

3. なぜ牛の皮が天に昇れるのか

(1) 白鳥処女説話から「七夕型・天人女房」へ—蚕馬神話による影響—

上記のように、蚕馬神話の馬の皮は繭の象徴であるため天に昇ることができ、そして「黄牛化蚕」では馬が牛に置き換えられて「牛の皮」となったと推論した。しかし、先述したように、蚕馬神話が「黄牛化蚕」という中間段階を経て、「七夕型・天人女房」へと変容してきたという呉の主張は成立し難い。そこで、中国の「七夕型・天人女房」の形成過程に蚕馬神話による影響という可能性を検討するとともに、牛の皮の説明のために呉の説を補足しなければならない。

そのために、蚕馬神話とは別に、もう一つ重要な話と考えられる、女と毛皮に関する白鳥処女説話という話について、まず検討を加える。この話も「七夕型・天人女房」の形成に影響を与えたと考えられる。

『玄中記』に記録される最古の白鳥処女説話「姑獲鳥・毛衣女」では、「衣毛為飛鳥、脱毛為女人（毛を着ると鳥になり、毛を脱ぐと女になる）」とある。白鳥処女説話における核心モチーフは以下ようになる。

1. 天女／鳥が羽衣／毛を脱いで処女に変身して地上に降りる。s
2. 人間の男が羽衣／毛を盗んで処女と結婚する。
3. 処女は羽衣／毛を取り戻して天に帰る。

これ以降の白鳥処女説話は、これらのモチーフに新たなモチーフを加え、内容を充実させていくことになる。「七夕型・天人女房」には「織姫が天から降りて水浴する」、「男が衣を盗んで織姫と結婚する」、「織姫が天に帰る」というモチーフ

があるので、鐘敬文（1933）⁽²⁹⁾をはじめ、中国の研究者は「七夕型・天人女房」を含む中国の天人女房譚を「白鳥処女説話」に分類するのが一般的である。漆凌云は『中国天鵝処女型故事研究』⁽³⁰⁾の中で、中国の「七夕型・天人女房」を「白鳥処女説話・妻を得る型」に分類している。『中国民間故事類型』では、中国の「七夕型・天人女房」は「動物／妖精と人間の結婚・白鳥処女説話」に分類され、古代の牽牛織女星に関する七夕伝説が白鳥処女説話と結びついたものと考えられている⁽³¹⁾。

ところが、古い七夕伝説において、牽牛織女はいずれも天上に住んでいた神であり、天から地上に降りてはこない。それが白鳥処女説話と結びつくと、「七夕型・天人女房」になって、「織姫が天から降りて水浴する」、「男が衣を盗んで織姫と結婚する」、「織姫が天に帰る」というモチーフが生まれた。さらに、男が天女を求めて天に昇るというモチーフも加えられた。しかし、たとえ織姫の衣を白鳥天女の羽衣と同一と見なし、天女の衣に天に昇る力があるとするとしても、なぜ牛の皮にも天に昇る力があるのかは説明できない。そこで、最後にこの点について検討する。

ここで重要になるのが蚕馬神話の影響である。蚕馬神話では、女が蚕と化す一番重要なポイントは馬の皮との結合である。先述したように、馬の皮は繭の象徴として昇天する力を持つようになった可能性がある。蚕馬神話における馬の皮（繭）に包まれて天に昇って蚕になる娘は、繭から取った糸で織られた天衣を着た天上に住む織姫を連想させる。『史記・天官書』では、「織女、天女孫也（織女とは、天女であり、天帝の孫娘である）」とあるが、織姫は天女だけでなく、紡織を司る神でもあり、民間では常に蚕の神あるいは蚕の象徴と見られていた。荒川（2006）は日本の記紀神話における高天原の織姫について、「既に高天原において機織りが行われており、養蚕は当然行われている」⁽³²⁾と主張している。同じように、中国の「七夕型・天人女房」において、天上に住んでいる織姫の仕事は天衣を織ることであり、蚕の脱いだ繭から作られた糸で織られた天衣を着ているのは当然であろう。こうしてみると、「七夕型・天人女房」における織姫の天衣は蚕馬神話における馬の皮と同様に繭の意味を持っている可能性がある。

(2) 繭の象徴としての牛の皮

上記の解釈を踏まえれば、中国の「七夕型・天人女房」では牛郎がなぜ牛の皮を借りて天に昇るのかを説明することが可能になる。古い七夕伝説が白鳥処女説話と結びついてから、織姫が天衣を脱いで地上に降り、また天上に帰るという中国「七夕型・天人女房」の話が生まれたのは明らかである。しかし、白鳥処女説話では、鳥は毛を着ると天に帰ることができたが、中国の「七夕型・天人女房」

(29) 鐘敬文「中国的天鵝処女型故事—獻給西村真次和顧頡剛兩先生」『民衆教育季刊』、1933年。

(30) 漆凌云『中国天鵝処女型故事研究』北京師範大学博士学位論文、2005年、35頁。

(31) W・エバーハルト『中国民間故事類型』商務印書館、王燕生・周祖生訳、2017年、57頁。

(32) 荒川理恵「『古事記』における養蚕起源神話—馬と蚕をめぐる—」『学習院大学上代文学研究』学習院大学上代文学研究会同人、1994年、34頁。

では、織姫は自分の衣服を取り戻すことができず、王母に捕らえられて天に帰ったため、蚕としてはまだ不完全な状態である。このような不完全な状態を解決するために、織姫は新しい服（繭）と結合しなければならぬ。織姫の古い衣服は牛郎が牛の指示によって盗んで隠したものであるため、問題を解決する鍵は牛あるいは牛郎に関わっていると推論できる。古い七夕伝説では、牽牛星はもとも天上で車を引く牛であり、農耕神の象徴であったが、伝説の変容につれて、牽牛星が人格化されてきた。それとともに、不思議な力を持つ牛と人間の牛飼いととしての牛郎に分化してきた。牛が人間の言葉を話したり衣服を盗むことを教えたりすることができることは、牛の不思議な力を示唆している。そのため、不思議な力を持つ牛が、牛郎を助ける道具になる。牛郎が牛の皮を着て天に昇るのは、牛と再び一つになり神としての牽牛星に戻ることを意味している一方で、天衣を失った織姫が再び皮（繭）と結合して蚕の神に戻るのを助ける役割も果たしているであろう。

蚕馬神話では、馬の皮が繭の象徴とみられ、女が馬の皮と結合すると、天に昇って蚕になる。「七夕型・天人女房」はこのような蚕馬神話の影響を受ける一方で、牽牛織女二星に関する古い七夕伝説から発展してきた話である。牽牛織女の古い七夕伝説の中で「牛」がすでに定着していたため、馬の皮の代わりに牛の皮を繭の象徴と見なしたと考えられる。牛郎が牛の皮を着て天に昇って織姫と再会するのは、繭を蚕としての織姫と結合させることを意味している。蚕は七日ほどに一度皮を脱ぐが、二人が会う日も「七」に関わっているのは、このためであろう。

古い七夕伝説が白鳥処女説話と結びついて中国の「七夕型・天人女房」が生まれたわけであるが、この過程で、蚕馬神話における動物の皮が繭の象徴として天に昇るというイメージが影響して、中国の「七夕型・天人女房」において、牛郎が牛の皮を着て天に昇るという昇天モチーフが形成されたと考えられる。

まとめ

本稿では、中国の「七夕型・天人女房」における牛の皮の意味について考察した。中国の「七夕型・天人女房」は常に農耕文化と養蚕文化が結びついたものとされている。そのため、「七夕型・天人女房」における織姫と養蚕文化とのつながりを確認し、養蚕起源神話である「蚕馬神話」を導き出した。その後、「蚕馬神話」の歴史や中国の養蚕歴史に基づいて検討することによって、中国の民間伝承の中で、蚕が常に女性と結びつき、織姫が蚕の象徴とされていたことが確認できた。中国では、繭には天に昇る力があると考えられていたので、「蚕馬神話」の中で馬の皮が繭の象徴として少女を包んで天に昇る展開になったと推測できる。この繭の昇天する力に留意するならば、中国の「七夕型・天人女房」において、蚕の象徴である織姫が着る天衣は繭の象徴とされていた可能性がある。織姫は天衣を

牛と牛郎に盗まれたので、蚕（の神）として不完全な状態になっていた。この不完全な状態を解決するため、牛の皮に繭の象徴としての天に飛ぶ力が与えられ、この牛の皮を牛郎が着て織姫と結びつくことによって織姫を完全な状態に戻した。つまり、中国の「七夕型・天人女房」に登場する牛の皮は、単なる犠牲動物ではなく、繭の象徴でもあると考えられる。

文献一覧

一次資料

中国民間故事集成編輯委員『中国民間故事集成』全巻、中国ISBN中心、1994-2010年。

日本語文献

荒川理恵「『古事記』における養蚕起源神話—馬と蚕をめぐって—」『学習院大学上代文学研究』学習院大学上代文学研究会同人、1994年。

折口信夫「水の女」『民族 第二巻第六号』民族発行所、1927年。

君島久子「中国の羽衣説話：その分布と系譜」『芸文研究』慶応義塾大学芸文学会、1967年。

_____「中国の羽衣説話：日本の説話との比較」『中国大陸古文化研究』中国大陸古文化研究会、1965年。

新城理恵「先蚕儀礼と中国の蚕神信仰」『比較民俗研究』、1991年。

李守愛「日本の平安時代における七夕・乞巧奠の受容の過程について」成大宗教與文化學報、2006年。

中国語文献

陸殿奎編「黄牛化蚕」『浙江省民間文学集成・嘉興市巻』浙江文芸出版社、1991年。

漆凌云『中国天鵝処女型故事研究』北京師範大学博士学位論文、2005年。

呉曉東「蚕脱皮為牛郎織女神話之原型考」『民族文化研究』中国社会科学院民族文学研究所、2016年。

_____「从蚕馬神話到槃瓠神話的演變」黔南民族師範学院学報、2016年。

王樹金「馬王堆漢墓帛書『天文气象雜占』研究三十年」湖南省博物館館刊、2007年。

王孝廉『中国神話世界・下編：中原民族的神話与信仰』洪葉文化事業有限公司、1974年。

W・エバーハルト著『中国民間故事類型』王燕生・周祖生訳、商務印書館、2017年。

游修齡『中国農業通史・原始農業卷』中国農業出版社、2008年。

趙豊「絲綢起源的文化契機」『東南文化』、1996年。

鐘敬文「中国的天鵝処女女型故事—獻給西村真次和顧頡剛兩先生」『民衆教育季刊』、1933年。

中西進、王曉平「七夕星歌的交流史潮流（上）—中日詩歌自然意向対談録」『日本語学習与研究』、1994年。

古典文献

戴圣編、金曉東校注『礼記』上海古籍出版社、2016年。

干宝著、余引校注『搜神記』貴州民族出版社、2019年。

郭璞著、沈海波校注『山海經』上海古籍出版社、2015年。

黎波訳『詩経』、吉林美術出版社、2015年。

荀子著、張覚校注『荀子』上海古籍出版社、2015年。

王元圻編『古詩十九首』浙江古籍出版社、2020年。

新訳『昭明文選』、三民書局、2001年。

許慎『説文解字』中華書局、1963年。

応劭著、吳樹平校注『風俗通』天津人民出版社、1980年。

黎波訳『詩経』、吉林美術出版社、2015年。

宗懐著、守屋美都雄訳注『荊楚歳時記』、平凡社、2000年。

【付記】：本稿は修士論文「日中七夕型・天人女房における昇天モチーフに関する比較研究」（2023）の第二章を基にしている。